

頁	年	月日	事
26			
14	(貞和3年)	霜月26日	「安部野ノ合戦ハ、霜月廿六日ノ事ナレバ」寒さのため生死不明になった敵兵を、楠木正行は助ける。
14	今年	(?)	楠木正行は、敵兵に衣類や薬を与え「如レ此四五日皆勞リテ」送ってやった。
14		(12月13日)	「サモテ今年兩度ノ合戦ニ、京勢無下ニ打負テ、畿内多ク敵ノ爲ニ犯シ奪ハル」
14			高師直、師泰を両大将として、大軍を派遣する。
14		12月14日	高師泰は三千余騎にて「早旦ニ」淀に到着、二万余騎となる。
15		同25日	高師直は七千余騎にて八幡に到着、六万余騎となる。
15		12月27日	大軍の淀・八幡集結を聞き、楠木正行・正時ら、吉野の皇后に参上する。
17		其日	楠木正行は百四十三人の兵と先帝の廟に参拜し、如意輪堂の壁に和歌を書き留めて、吉野と出陣する。
17		(?)	師直・師泰は淀・八幡で越年し、諸国の軍勢を待つて河内へ向かう予定だったが、楠木の軍勢が、「今日河内ノ往生院ニ著ヌト聞ヘケレバ」作戦を変更する。

『太平記』(日本古典文学大系) 年表索引稿(三)

卷 26 ~ 卷 32

谷 垣 伊 太 雄

17	(貞和4年)	正月2日	師泰の二万余騎の勢、淀を出発し、「和泉ノ堺ノ浦」に陣どる。
17		3日	「師直モ翌日三日ノ朝八幡ヲ立テ六萬餘騎四條(四條畷か)ニ著ク」
18		正月5日	「早旦ニ」四條隆資を大将とする二万余人の勢、飯盛山に向かう。
18		(同日)	楠木正行の三千余騎、四條畷へ押し寄せる。
20		(同日)	「飯盛山ノ南ナル峯ニ」控えていた佐々木道誉の三千余騎、疲弊した楠木勢に攻めかかる。
20		(同日)	「今日ノ軍ニ討入セント思テ」連署をした楠木正行ら百四十三人は、敵将高師直をめざして進撃。
23		(同日)	上山六郎左衛門、高師直の身代わりとなって討死する。
26		(同日)	楠木正行は師直を急追したが「今朝ノ巳刻ヨリ申時ノ終マデ」の合戦に疲れ、撃ち得ず。
27		(同日)	矢を射られた楠木兄弟は刺し違えて死す。
27		(同日)	和田新發意賢秀、湯浅本宮太郎左衛門に斬られて戦死。
27		(?)	殺した和田賢秀に睨まれた湯浅は「其日ヨリ病付テ」「軍散ジテ七日ト申ニ」あがき死にする。
28		(5日)	和田新兵衛正朝は「日巳ニ夕陽ニ及」ぶまで安保忠実と追われ、結局戦死する。
28		(同日)	「今日一日、合戦ニ、和田・楠ガ兄弟四人、一族二十三人、相順フ兵百四十三人」が戦死。
28	(延元3年)		「先年奥州ノ國司顯家卿、安部野ニテ討レ」新田義貞が越前で亡んだ後は、楠木だけが脅威であった。
29	(貞和4年)	正月8日	高師泰は「楠ガ館ヲモ焼拂ヒ、吉野ノ君ヲモ可レ奉レ取」と、堺の浦を出立し、石川河原に布陣。
29		同日	高師直は三万余騎の勢で平田を出立し吉野の麓へ押し寄せる。
29		(同日)	四條隆資は天皇に「昨日正行已ニ討レ候。又明日師直皇居へ襲來仕由聞ヘ候」「今夜急ギ天河ノ奥加納(賀名生)ノ辺へ御忍候ベシ」と進言する(文脈からは14日、正行の死からは6日となる―私注)。
29		(同日)	後村上天皇、吉野を逃れて賀名生へ(前項と同じ。諸記録により、5日・12日・13日説もあり―私注)。
30		(?)	高師直、吉野に押寄せ皇居を焼く。藏主堂も炎上(他文書によれば、貞和4年正月28日)。

		27	
68		8月11日	「八月十一日ノ宵ニ」赤松円心ら、師直の屋形へ行き、作戦を相談する。
68		(?)	師直からの連絡(直義の師直殺害計画)を受けた師泰「其日石河ノ陣ヲ」出発し京に入る。
67	去年		
66	貞和5年 閏6月3日		雲景は愛宕山でのことを未来記として書え「貞和五年潤六月三日ト書付テ」進奏する。
59	貞和5年 6月20日		羽黒の山伏雲景、天龍寺を一見するため、西郊に赴く。山伏に愛宕山へ案内され、不思議な見聞をする。
58		(12日)	「其次ノ日、終日終夜大雨」が降り、昨日の汚穢を淨め「十四日ノ祇園神幸ノ路ヲバ清メケル」
58		6月11日	田楽が棧敷倒壊して多くの死者が出た。山伏が倒壊させたという。
55	同年	6月11日	抖薙の沙門が、四条橋敷設のため、四条河原で田楽を興行する。
55	今年		「今年多ノ不思議打續中ニ、洛中ニ田楽ヲ翫フ事法ニ過タリ」
54		閏6月5日	「潤六月五日戌刻ニ、巽方ト乾方ヨリ」電火が出現し戦い合う(園太曆によれば、3日)。
54		同6月10日	「同六月十日ヨリ太白・辰星・歳星ノ三星合テ打續」く。
54		同6月3日	「同六月三日八幡ノ御殿、辰刻ヨリ酉刻マデ鳴動ス」
54		27日	「明ル二十七日午刻ニ」清水坂より失火、清水寺炎上する。
54		2月26日	「同二月二十六日夜半許ニ將軍塚夥シク鳴動」し、兵馬が空を馳せ過ぎる音もする。
54	(貞和5年)	正月	「貞和五年正月ノ比ヨリ、犯星客星無隙現」ず。
50		(?)	西国を静謐させるため、足利直冬を備前に下向させる(他文書によれば、貞和5年4月11日)。
36		(?)	師泰は塔の九輪を鑕子に鑄させる(前項とともに、師泰兄弟の悪行)。
35	今年		「今年石河川原ニ陣ヲ取テ、近邊ヲ管領セシ後ハ、諸寺諸社ノ所領、一処モ本主ニ不充付テ」
34	(?)		奢侈に奢る師直は、二条前関白の妹を盗む。「此テ年月ヲ經シカバ」男兒生れ、武藏五郎と名づける。
32	貞和5年	正月5日	「四條繩手ノ合戦ニ、和田・楠が一族皆亡ビテ」楠木正儀のみ生残っていると聞き、高師泰攻撃する。

28					85														
85	84	84	84	84	81	80	80	78	75	75	75	75	74	73	73	71	71	71	69
(観応元年)	去年		去年	貞和6年	貞和5年	当年			貞和5年					(貞和5年)	(貞和4年)	暦応			貞和5年
6月20日	9月	同10月23日	8月14日	2月27日	12月26日	3月7日	〇 <small>(ウ)</small>	8月24日	12月8日	同26日	同22日	同10月4日	9月13日夜	同9月13日	(14日)		8月13日		8月12日
直冬の命を受け石見国で威をふるう三角入道を退治するため、師泰、都を出発し石見に向かう。	足利直冬は備後を落ちて、肥後にいた。やがて少弐頼尚の女婿となった。	足利義詮が鎌倉より上洛した(巻27および『師守記』では「22日」)。	師直・師泰らが將軍の屋形を包囲した。	観応と改元。	「天子登壇即位シテ數度ノ大禮事ユヘナク被レ行シカバ、今年ハ日出度暮ニケリ」	大礼は「當年三月七日ニ可レ行ト沙汰有シカ共」実行されず。	守護代八木光勝の変心によって、畠山直宗は自害し、上杉重能は捕えられて殺される。	「夜半許ニ」高師直の命令を受け、八木光勝は、越前に流罪となった上杉重能を討つため配所へ赴く。	直義、四十二歳で剃髮する。	義詮、三条坊門高倉の直義邸に入り、政務を執行する。	義詮、入洛する。	足利義詮、直義に代つて政務を執るちめ、鎌倉を出発。	杉原に負けた直冬は、筑紫へと落ちてゆく。	備後の輿にいる直冬を、杉原又四郎が攻める。	(尊氏からの提案により師直が引きあげた)「次ノ朝」妙吉侍者を逮捕しようとしたが、すでに逐電。	「去年」楠正行が討死して「彌無爲ノ世ニ成ヌト喜合」っていたのに、乱れおこり人々は歎く。	「暦應以來ハ天下武家ニ歸シ、世上モ少穩ナリシ」	「明レバ八月十三日ノ卯刻ニ」出陣した師直・師夏の軍勢は、將軍(尊氏)の御所を囲む。	「宵ヨリ」洛中には、直義と師直との合戦があるとの事で、數万の兵が馳せかう。

29		85	
113			
113			
113			
113			
112	観応2年	同正月8日	越中の守護桃井直常、越中を出立して七千余騎で都に向かう。
109	正平5年	12月13日	吉野から直義あて、合体を勅免する宣旨の日付。
93	(観応元年)	12月9日	吉野(南朝)に降参を乞う直義の書状の日付。
93	元弘の初		「元弘初、先朝(後醍醐帝)爲 _二 逆臣 _一 被 _レ 遷 _三 皇居於西海 _二 (南朝に降参を乞う直義の書状)。
92	観応元年	10月25日	直義を鎮守府將軍に補任する光厳上皇の院宣の日付。
91		11月19日	尊氏、師直の軍勢、備前の福岡に着く。「年明テコソ筑紫へハ向ハメトテ」「徒ニ日ヲ」送る。
91		10月13日	「早旦ニ」師直は、直義の出奔を危惧する人々を押えて、都を出発。
90		(12日)	「將軍、已明日西國へ可 _レ 被 _レ 立ト聞ヘケル其夜」直義は、石塔頼房を従えて逃亡する。
90		10月13日	足利尊氏、師直らと八千余騎で、直冬誅罰のために中国へ出発(28日とすべきである)。
89		去月13日	足利直冬の九州下著の日付(観応六年のことではなく、貞和5年9月13日とあるべき箇所)。
89		9月29日	肥後国から都へ早馬を立てて、九州の蜂起を註進。
88		(26日)	「夜ハ既ニ明ヌ」城陥り、佐和善四郎討死する。
87		8月25日	「宵ノ間ニ」三吉一揆の精銳、鼓崎の城を攻める。
86		(27日)	森・高橋、渡河して攻める。痛手を負った森らの軍勢を師泰が援護して攻撃する。
86		(27日)	「日已ニ晩ニ及ヌ」ということで、瀬踏みをさせて明28日に渡河すべしと評定あり。
85		7月27日	「暮程ニ」師泰、江河に着く。
		(9日)	(義詮の著到)「翌日ハ一萬騎ニ減ズ」
		(8日)	(義詮の著到)「初日ハ三萬騎ト註シタリケル」

122		正月13日	「早旦ニ」上杉朝定は、石見から上京した高師泰を討つため、備後を出発する。備中で対決。
120		(?)	「七日ニ當リタリシ日」岩室寺の院主雲曉僧都、義詮のもとに来て、仏の加護を進言する。
120		(?)	義詮が「登山シ給シ日ヨリ」岩室寺の衆徒、勝軍毘沙門ノ法を行なう。
120		(16日)	尊氏は義詮ら二千余騎を丹波の石籠寺にとどめおく。
120		(16日)	(尊氏は)「今日ハ旅ヲ山陰ノ夕ノ雲ニ引別テ、西国ヘト赴キ給ヒケル
120		(15日)	「將軍ハ昨日都ヲ東嶺ノ曉ノ霞ト共ニ立隔リ」
120		(16日)	「今日ハ又將軍都ヲ落給テ桃井驍テ入替ルト聞ヘシカバ、八幡ニハ是ヲ悦ビ洛中ニハ潜ニ悲ム」
119		(15日)	「昨日ハ將軍都ニ立歸テ桃井戰ニ負シカバ、洛中ニハ是ヲ悦ビ八幡ニハ聞テ悲ム」
119		正月16日	「早旦ニ」尊氏は「丹波路ヲ西ヘ落給フ」
119		15日	桃井の敗退により、尊氏方の勢がふえろと思われたのに「夜半許ニ」京都の勢が八幡の直義勢に付く。
119		(同日)	終日の合戦に疲れた桃井は、栗田口から東へ引き退き「其夜ハ」関山に陣取る。
119		(同日)	「日巳ニ夕陽ニ及テ、戰數剋ニ成ヌレドモ、八幡ノ大勢ハ曾不ニ攻合セ」
118		(同日)	桃井の七千余騎、仁木・細川の一万余騎と対戦。
115		(同日)	尊氏等の勢は、三隊に分れて都の桃井を攻撃。
115		(同日)	都を脱出した義詮は、向日町辺で、上京してきた尊氏・師直の二万余騎に相会。
114		同日	「午刻ニ」義詮に代って、桃井京に入る。
114		正月15日	「早旦ニ」京都では勝負なしと考えた義詮は、西国を指して都から落ちる。
113		13日	「夜ヨリ」上京した桃井は、比叡山に陣取る。
113		同日	「暮程ニハ」義詮の軍勢、五百騎に足らず。
113		(10日)	(義詮の著到)「翌日ハ三千騎ニナル」

140	(観応2年)	同26日	「將軍已ニ御合體ニテ上洛」師直兄弟も遁世者に身を紛らせて従う。
138	去年	12月	時衆からの連絡「去年ノ十二月ニ」上杉能憲が上野で謀叛を起し、師冬らが自害したと報告。
138		25日	師直兄弟が鎌倉へ下って師冬と合流しようとする所に、「夜半許ニ」甲斐国より時衆が到着。
137	(観応2年)	(?)	葉師寺公義は、師直兄弟が自分の諫言を聞かずに降参しようとするので、遂に出家する。
			四國へヤ落ルト評定有ケル
136	去年		直義は「師直去年ノ振舞(尊氏邸を囲み、直義を討とうとした)」を当然憎むであろうから、「師直ハ
136		(?)	饗庭命鶴丸の進言により「其夜ノ自害ハ留リテゲリ」
134		(?)	尊氏は、師直らと呼び、「世中今夜ヲ限り」と告げて自害しようとする。
132		(?)	「朝ニ此夢ヲ語テ、今日ノ軍如何アラズラント危ブミケルガ、果シテ軍ニ打負ヌ」
132		(?)	「其前ノ夜」武蔵五郎師夏ら、金剛蔵王権現と対戦し敗れた夢をみた。
131		(?)	尊氏方、敗送する。
129		同17日	夜、尊氏・師直ら二万余騎、御影の浜に押し寄せる。
129		(?)	畠山国清三千余騎で、幡磨から打出に向かい布陣。石堂ヅ上杉・光明寺から畠山の陣に参加する。
128		2月13日	尊氏ら、光明寺を出立し兵庫湊川へ向かう。
128	(観応2年)	(2月4日)	「其日ノ暮程ニ」摂津守護赤松範資より、尊氏の軍勢を要請する早馬「一日二三度マデコソ申サレケレ」
127	先年		(人々の噂)「先年蔵王堂ヲ被レ焼タリシ罪」によって、師直には凶兆となる和歌が降ったこと。
126		(?)	城側の愛曾が召仕う童、物狂いとなり「今七日が中ニ」師直らが滅ぶとの伊勢大神宮の示験を告げる。
125		同4日	「同四日ヨリ」光明寺合戦始まる。
125		2月3日	尊氏は書写坂本を出立し、石堂頼房の籠る播磨光明寺に向かう。
124	観応2年	2月	備中・美作の合戦に勝った師泰らは、將軍の陣取る書写坂本に到着。

		30	
158	16日		宇都宮の千五百騎「午剋ニ、下野國天命宿ニ打出タリ」
158	12月15日		宇都宮は尊氏に應ずるため、宇都宮を出発して薩埵山へ急行する。
157	同日		直義も鎌倉を出発して薩埵山に向かう。
156	11月晦日		尊氏、駿河国薩埵山に布陣。
156	翌日		尊氏、都を出発し鎌倉へ下る（史実としては、11月4日）。
156	10月13日		尊氏は、直義誅罰の宣旨を再び受ける（23日とする本あり。10月24日南朝からの諭旨が正しい）。
156	10月8日		越前に引返していた直義は、畠山の離反等の後、桃井の勧めにより、越前を出発して鎌倉へ下る。
155	翌日		鴨社の変異の後「果シテ翌日ノ午剋ニ」佐々木道誉配下の多賀将監と秋山光政が合戦し、秋山討死。
155	其日		「未ノ剋ニ」鴨の糺の神殿鳴動し、流鏑矢が飛び去ったと奏聞あり。
155	同9月7日		直義は、石塔・畠山・桃井を大将とし、近江国八相山に布陣。
155	同8月18日		尊氏は、直義追討の宣旨を受けて近江国鏡宿に下著。約三百騎の勢が一万余騎となる。
151	（8月1日）		れば、直義逐電の時、尊氏は石山に、義詮は播磨にいたので、京に在るのは非である）。
151	7月晦日		義詮は尊氏の較とに行き「今夜京中ノヒシメキ、非ニ直事ニ覺テ候」と進言したが、動かず（参考本によ
150	同7月晦日		石塔義房ウ桃井直常、諸将間に対立の動きがある事を理由に、直義に北国へ下向するように勧める。
148	（？）		直義の幼児如意王急死する（観応2年2月25日、八幡の陣営で夭折）。
148	（観応2年）		尊氏・義詮・直義は、夫々上洛し、和睦する。
143	（同日）		西四郎は師夏に「命惜ク候ハズ、今夜速ニ髻ヲ切テ僧カ念仏衆カニ成」るように言ったが、後に斬首。
141	（2月26日）		武庫川を渡った所で見破られた師直兄弟らは次々と殺される。

165			15日	「十五日過ケレバ」武家より、馬・沙金等の進奏あり。
165		(8日)		「後七日(正月8日から14日)御修法ハ文觀僧正承テ、帝都ノ眞言院ニテ被レ行」
165		3日		「三日ノ月奏許有テ」
165		(正月1日)		「寅ノ時ノ四方拜」は行なわれた。
165	(正平7年)			「アラタマノ春立ヌレドモ」山中なので白馬踏歌の節会等は行なわれず。
165	正平6年			「憂カリシ正平六年ノ歳晚テ」
165	元弘			「元弘一統ノ政道如レ此ニテ亂シヲ、取テ誠トセザリケル心ノ程コソ愚カナレ」
163	(觀応2年)			北朝の諸公卿、二条良基ら賀名生に参る(觀応2年の12月前後から、賀名生参候が始まった)。
163	(觀応2年)			義詮、吉野に使者を送り和睦を乞う。吉野側、これを許諾する。
162	今年	春		「今年ノ春ハ禪門又怨敵ノ爲ニ毒ヲ吞テ、失給ケルコソ哀ナレ」
161	去年	春		「去年ノ春ハ禪門(直義)、師直ヲ被レ誅」
161	去々年	秋		「去々年(先年 貞和五年とあるべき)ノ秋ハ、師直、上杉ヲ亡シ」
161	觀応3年	2月26日		直義は「觀應三年壬辰二月廿六日」 「黄疽」により急死する。鳩毒による毒殺との風聞あり。
161		正月6日		降参した直義は、將軍(尊氏)に付き従い、「夜ニ入テ」鎌倉に帰る。
160		同日		小山判官の七百余騎も宇都宮に力を合わせて、国府津に到着。直義の軍は壊滅する。
160		同日		宇都宮の三万余騎、足柄山の敵を撃退して、竹下に陣取る。
159		同日		「那和ノ合戦ト同日ニ」武蔵国守護代の吉江氏も津山・野与に敗退する。宇都宮勢三万余騎となる。
159		(同日)		那和庄での合戦。宇都宮・葉師寺勢は桃井・長尾勢を撃退させる。
159		同日		三戸七郎の狂気による自害で一時は軍勢の減った宇都宮勢、氣を取直して「午剋ニ」利根河渡る。
158		此日		佐野・佐貫ら五名余騎、宇都宮勢に加わる。

		31		32	
184	(20日)	新田義興・義治は、仁木頼章・義長と戦い負傷して敗走する。			
182	(20日)	義宗は尊氏を追撃したが「日己ニ西ノサガリニ成テ河ノ淵瀬モ不三見分ニ本陣へ引返し、尊氏助かる。			
179	閏2月20日	新田義宗ら「辰刻ニ武藏野ノ小手差原へ」出陣(20日の合戦は人見金井原の戦か)			
178	(19日)	「己ニ明日矢合ト定メラレタリケル夜」石堂義房、子息頼房に尊氏討伐の陰謀を話したが、反対される。			
177	(?)	「久米河ニ一日逗留シ給ヘバ」尊氏勢へ八万余騎が馳せ参る(史実としては、尊氏は18日狩野川逃走か)			
177	16日	「早且ニ」将軍(尊氏)、鎌倉を立ち武蔵国に赴く。			
176	(正平7年) 閏2月8日	新田義宗・義治、吉野より勅旨を受け、西上野に挙兵。十万余騎となり武蔵国へ出陣。			
174	元弘建武	「元弘建武ノ後ヨリ、天下久ク離テ、一日モ未レ不レ治」			
171	(?)	光厳上皇ら「日ヲ經テ吉野ノ奥賀名生ト云所へ御幸成シ奉ル」(3月3日河内東条、6月2日賀名生)。			
171	(28日)	光厳上皇らが「鳥羽マデ御幸成タレバ、夜ハ早若タト明ハテヌ」			
170	同 27日	北畠顕能、五百余騎で持明院殿に参上し、光厳上皇らの南山遷幸を勅定として要請する。			
170	同 23日	三種の神器を八幡の後村上天皇に渡す(史実は、観応2年12月23日)。			
168	(同日)	細川頼春は討死、細川顕氏は逃走、足利義詮は近江へ落ちる。諸軍勢あつまり大軍となる。			
167	(同日)	「宵ヨリ桂川ヲ打渡テ、マダ篠目ノ明又閏ニ」和田・楠らの五千余騎、七条大宮に押し寄せる。			
167	同 27日	「辰刻ニ」中院顕能ら三千余騎、鳥羽より京都へ押し寄せる(史実としては、20日とする他本が正)。			
166	同 19日	「八幡へ行幸成テ、田中法印が坊ヲ皇居ニ被レ成」			
166	閏2月15日	「住吉ニ二十八日御逗留有テ、潤二月十五日天王寺へ行幸ナル」北畠顕能三千余騎で馳せ参ず。			
165	(?)	「住吉ニ臨幸成テ三日ニ当リケル日」大松が折れて倒れるという不思議があった。			
165	翌日	後村上天皇、住吉行幸(「園大曆」によれば、28日)。			
165	2月26日	後村上天皇、山中を出て住吉行幸のため東条へ。			

197		4月25日	義詮方の「四方ノ寄手同時ニ牒シ合セテ攻戦フ」
196		(?)	
196		翌日	楠正儀が「夜ニ入テ八幡へ引返セバ、翌日朝敵馳テ入替テ、荒坂山ニ陣ヲ取ル」。
194		同3月24日	義詮、三万余騎で洞峠に向かい、荒坂山で南朝方と戦う(他書によれば、27日)。
193		同17日	義詮、東寺に布陣、北畠顕能、八幡の山下に陣を移す。
193		同15日	義詮、東山に布陣。官方の北畠顕能は、都を退去し、淀・赤井に布陣。
193		3月11日	宰相中将(義詮)は、近江の四十九院を出立して京都に向かう(他書によれば、3月9日らしい)。
192		去月20日	「都ニハ去月廿日ノ合戦ニ打負テ、足利宰相中将殿ハ近江國へ落サセ給ヒ」光厳上皇らは賀名生へ遷幸。
192		3月4日	義興・義治は、鎌倉を退去して、国府津山の奥に籠る。
191		(29日)	「其曉」新田義宗は「越後へ落ラレケリ」
191		(28日)	夜半に、上杉憲顕は、勝算なしと考え、信濃国に逃走。
189		(28日)	長尾弾正・根津小次郎「今日ノ合戦ニ打負ヌル事」を恥辱と思ひ、尊氏を狙ったが果たさず。
189		(28日)	「其日ノ午刻ヨリ西刻ノ終マデ少シモ休ム隙ナク終日戦ヒ暮シテケリ」(尊氏勢、義宗勢を撃破)。
189		同28日	尊氏、笛吹峠へ押し寄せる。
188		同2月25日	尊氏は、石浜で大軍となり、義宗らを迎撃するため、武蔵の国府に赴く。
188		(?)	
187		2月13日	義興・義治は「二月十三日ノ鎌倉ノ軍ニ打勝」つ(史実としては、閏2月28日)。
185		(?)	(義興らへの鎌倉についての報告、鎌倉警固の足利基氏は「昨日ノ朝」三浦半島に向かった由)。
185		(?)	義興・義治、「夜半過程ニ」関戸にて、石堂義房らと相会する。
184		(20日)	義宗「今日ハ日巳ニ暮ヌレバ」小手差原に帰陣したのち、笛吹峠に向って「夜中ニ落給フ」

		32	
206	元弘建武	8月24日	「元弘・建武ノ亂ヨリ以來回祿ニ逢ナル所々ヲ數レバ」内裏をはじめ多数あり。
206	(文和2年)	2月4日	「同二年二月四日、俄ニ失火出來テ院御所持明院殿燒ニケリ」
206	同年	10月28日	陽祿門院、崩御(諸本にある11月28日が正しい)。
206		(9)	後光嚴夫天皇は光嚴上皇らを「南山ヨリ盗出シ奉ラン」としたが、結局、梶井宮のみ盗み出す(6月21日)。
205		(11月)	「翌ノ月大嘗会」(他書によると、文和3年11月16日)。
205	其年	10月	「其年ノ十月ニ河原ノ御禊有」(他書によると、文和3年閏10月28日)。
205		同9月27日	「文和」と改元。
205	觀応3年	8月27日	日野時光に預けられていた弥仁王が踐祚し、後光嚴天皇となる(8月17日が正しい)。
205	去年		弥仁王は、「去年」継母宣光門院の計らいで出家するはずだったが、占いにより中止していた。
204	(觀応3年)		「陽祿門院ト申シ、御腹ニ生レサセ給タリシ(弥仁王)が今年十五ニ成セ給フヲ」皇位につける。
201		(27日)	信濃の宗良親王も「同日ニ信濃ヲ立セ給フ」。しかし、後村上帝の八幡退去により、南朝勢は帰国する。
201		5月11日	吉良・石堂の六千余騎の先陣は、美濃の垂井・赤坂に着く。
201		4月27日	吉良三郎・石堂も、駿河国を出発。
201		5月11日	新田義宗・桃井直常の一万余騎のうち前陣は、能登国へ向かう(大系本の「九月」は誤植か―私注)。
201		4月27日	児島三郎入道志純の連絡を受け、新田義宗「越後ノ津張」を出発し、越中の放生津に着く。
198		5月11日	「夜半計ニ」後村上天皇を、八幡から「大和路へ向テ落サセ給」う。やがて河内の東条に着く。
198		3月15日	「三月十五日ヨリ軍始テ、已ニ五十餘日ニ及バ」八幡の軍勢も、力尽き、降人となる兵も続出。
198		(9)	後攻めを期して河内へ派遣されていた和田・楠のうち、和田五郎が急死してしまう。
197		(同日)	左兵衛督と選抜隊は「夜已ニ二三更ノ程也ケレバ、宿院ノ後ヲ廻テ如法經塚へ押寄」る。
197		5月4日	「官軍七千餘騎が中ヨリ夜討ニ馴タル兵八百人ヲ勝リテ、法性寺左兵衛督ニ付ラル」

224		同 13日	直冬、都に入る。越中の桃井らも上洛（史実としては、正月22日入京）。
224	（文和4年）	正月12日	「暮程ニ」尊氏は、後光厳天皇を奉じて近江武佐寺へ落ちる（史実としては、文和3年12月24日が正しい）。
223	文和3年	12月13日	足利直冬を大将として綸旨が出たので、山名時氏・師氏は五千余騎で伯耆国を出発。
217		（？）	山名時氏に招かれ総大将となった足利直冬は、尊氏・義詮追討の綸旨を、南朝から受ける。
216		（？）	「將軍尊氏卿上洛」（尊氏の鎌倉出発は、文和2年7月29日、後光厳天皇の京都還幸は9月21日）。
216	翌年	春	新田義興・義治が相摸から落ちたため、東国は安定し、尊氏も上洛。
216		（？）	一時は都を征圧した四条隆俊・山名父子らも、京都から引きあがる（7月23日）。
215		（同日）	「其夜ハ」腰輿を塩津に留めんとしたが叶わず、細川清氏が天皇を背負って、美濃国垂井へ遷幸。
214		（同日）	堀口貞祐、義詮の軍勢を阻止しようとする。堀口勢と戦い佐々木秀綱ら討死する。
213		同 6月13日	義詮、後光厳天皇を奉じて東近江に落ちる。
213		11日	「曙ニ」山名勢は、善峰の高師詮・阿保・荻野を攻撃。高師詮は自害する（6月12日が正しい）。
212		翌日	義詮からの使者によって、細川清氏も「翌日早旦ニ東坂本へ被レ参ケル」
212		（同日）	細川清氏は「西坂本ニ引、其夜ハ遂ニ落給ハズ」
212		（同日）	「大將義詮朝臣モ日暮テ東坂本へ落給フ」
211		（同日）	奮戦していた細川清氏も、四明が岳へ退却。
209	文和2年	6月9日	「卯刻ニ」南朝勢、攻撃開始。
209		（6月6日）	後光厳天皇は東坂本へ行幸。足利義詮は、仁木・細川・土岐・佐々木らと鹿谷を背に布陣。
208		（？）	四条隆俊らの三千余騎も呼応して、淀・鳥羽・梅津辺まで進撃。
208	（文和2年）	5月7日	師氏は父時氏と共に出雲等を制覇し、南朝方となり、伯耆を出発（入京は6月6日）。
208	文和元年	8月26日	山名師氏、若狭国の当知行の件で対面せぬ佐々木道誉の無礼を怒り、「夜半ニ」都から伯耆に下る。

237		
234	(同日)	一度は優勢だった山名師氏も、遂に敗走し、河村弾正の犠牲により、辛うじて淀に戻る。
234	(同日)	山名師氏に斬りかかった赤松朝範は、負傷したものの命助かる。
229	同日	河原重行は「今日ノ合戦ハ我身獨ノ喜ビ哉」と、元暦の先祖と同様、敵中に駆け入り討死する。
229	2月4日	義詮は七万余騎で「同日ノ早旦ニ」神南の北の峯に陣を取る。(史実としては、文和4年2月6日)。
226	8月	鎌倉合戦で負けた諏訪頼重らが自害した時に、鬼丸という太刀があった。
	建武2年	
	(文和4年)	

《注》

- 1 『太平記』(日本古典文学大系 34・35・36)のうち、本稿では、36の巻26から巻32までをとりあげた。
 2 本文の引用を除き、巻数、頁数、年・月・日ともに算用数字を使用した。
 3 「記事」欄のうち、本文を引用した場合は「」をつけ、人名・年月日等についての補記と、大系本の頭注・補注に注記がある場合(史実とのズレなど)のみ、()内に要約して記したが、二、三箇所私注を付した。
 4 前稿『樟蔭国文学』第十八号・第十九号 同様、故事引用の文中に出てくる年号(巻二十六・三〇頁の「承平四年八月朔日」や巻二十八・九五頁の「漢ノ元年十一月」、巻二十九・一一四頁の「治承」・一二一頁の「天寶十一年」、一三二頁の「元暦」、巻三十・一六三頁の「承久」、巻三十二・二三四頁の「元暦」等)は省いた。
 (昭和57年6月3日稿)
 (本学助教授)